

- 徐勇展「THIS FACE」開催!
- BankART AIR 2021 SUMMER OPEN STUDIO 開催!
- バンカートスクール9月-10月期の講座
- BankART Under 35 2021
- BankART AIR 2021 SPRING オープンスタジオが開催されました!

# BankART NEWS Vol. 21

発行: BankART1929  
2021年7月5日発行

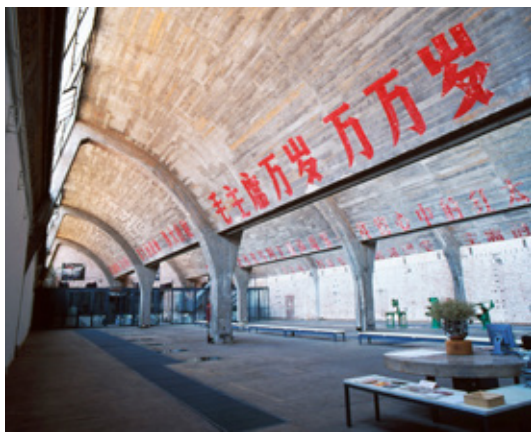
## 徐勇展「THIS FACE」開催!



2021年7月16日 [金] ~ 8月16日 [月] 11:00 ~ 19:00  
会場: BankART KAIKO (横浜市中区北仲通57-2 北仲 Brick&White1F)  
入場料: 700円 (64頁小冊子付) 無料 (障がい者手帳お持ちの方) 協力: 劉樟 海牛子。

中国人芸術家、徐勇の展覧会を開催します。本展覧会は、写真集「THIS FACE」をベースに、彼のこれまでの活動を紹介するものである。この写真集は、2011年1月19日の1日に、実在の性工作者・紫Uの顔だけを連写した約500点で構成されている。無表情な素顔から化粧をした顔へと変化していきだけでなく、接客後の表情の変化、次第に感情がさらけ出されていくさまが生々しく迫る。この「徐勇+紫U」写真集は、香港で発行された。

徐勇(じょ・ゆう) | 1954年上海生まれ。1965年に家族と共に北京に移住。1978年に河南科技大学を卒業。1984年~1988年北京広告公司にて写真家として勤務。1989年夏から1990年の春にかけて、北京特有の古い路地「胡同」を撮影し、1990年に『胡同101像』として刊行。この作品は日本では1994年に『胡同 北京の路地』として新潮社より出版、コニカギャラリーで作品展も開催された。(同書の文庫本サイズとして『胡同 北京下町の路地』が2003年に平凡社から出版されている。)これを機に、1993年には北京胡同文化遊覧活動を開始。そして、2003年中国現代美術の礎となる「再造798」活動を開始、798芸術区の創始者の一人として尽力する。その他の作品に、1992年中国の地方の人々の日常を撮影した『郷土中国』シリーズ(全4冊)、2014年には天安門事件を撮った写真集『底片(Negatives)』等、海外での展覧会も数多い。日本人との交流も多彩である。



798芸術区 (北京)

## バンカートスクール2021年9-10月 受講生募集

BankART school 2021年9月-10月に開講の講座が決まりました。(詳細はHPなどで後日発表)

「横浜・都市デザイン列伝」秋元康幸  
①9/9 ②9/16 ③9/23 ④9/30 ⑤10/7 ⑥10/14 ⑦10/21 ⑧10/28

「パブリックアート再考」村田 真  
①9/10 ②9/17 ③9/24 ④10/1 ⑤10/8 ⑥10/15 ⑦10/22 ⑧10/29

BankART schoolの概要 | 時間=19:30~21:00  
会場= BankART KAIKO、BankART Stationにて  
料金=1講座12,000円 入学金3,000円 (初めての方のみ)  
定員=16名

お申し込み方法 | ①受講したい講座名 ②お名前 ③ご住所 ④電話番号  
⑤メールアドレスを、メール・電話のいずれかにてお知らせください。  
お申し込み・お問い合わせ | BankART スクール事務局  
school@bankart1929.com TEL 045-663-2812



## BankART AIR 2021 SUMMER OPEN STUDIO 開催! @ BankART Station

- 参加作家  
アイヴァン・ティンブレル  
青木 崇  
秋山直子  
新江千代  
おどるなつこ  
片岡純也  
川口真人  
窪田久美子  
関 和明  
高久柊馬  
土本亜祐美  
辻 梨絵子  
中屋敷 南  
\_hpy  
橋村至星  
ピコ コンドウ  
細淵太麻紀  
松本恭吾  
宮崎優花  
山岡瑞子  
リン・チャーチル



会期 | 2021年8月8日 [日] ~ 9日 [月] 8月13日 [金] ~ 15日 [日] 11:00 ~ 19:00  
会場 | BankART Station (横浜西区みなとみらい5-1 新高島駅B1F) 入場無料

BankART Station では、現在21組のアーティスト達が、6月14日から約2ヶ月間、制作活動をおこなっています。基本的には、制作場所(スタジオ)の公開ですが、6月~7月に制作した成果物も発表します。是非皆様、お気軽にご参加ください。

### BankART AIR 2021 SUMMER アーティストトーク

全5回、毎週金曜日19:30~21:00 会場: BankART Station

\*ご参加はワンドリンクのオーダーをお願いします。  
週末に恒例のアーティストトークを行いたいと思います。皆さまお誘い合わせの上、ご参加下さい。メールにてご予約をお願い致します。

- 第1回 6/25 (金) 片岡純也 / 秋山直子 / 橋村至星 / おどるなつこ
- 第2回 7/2 (金) 辻 梨絵子 / 宮崎優花 / 新江千代 / 高久柊馬
- 第3回 7/9 (金) 松本恭吾 / 青木 崇 / 山岡瑞子 / 土本亜祐美 / アイヴァン・ティンブレル
- 第4回 7/16 (金) 川口真人 / \_hpy / リン・チャーチル / 中屋敷 南
- 第5回 7/23 (金) ピコ コンドウ / 関 和明 / 細淵太麻紀 / 窪田久美子

### BankART KAIKO の入居チームの紹介

馬車道のBankART KAIKOに、BankART Temporaryの2チームが入居。

「YPAM - 横浜舞台芸術ミーティング」(※前年度まではTPAM)  
舞台芸術の最前線で活躍する、演劇、ダンス、音楽の国際交流に携わるNPO法人。ホー・ツーニエン、アビチャップン・ウィーラセタクン、マーク・テ、ホー・ルイアンなど、アジアを代表する作家をいち早く紹介してきている。2021年より、創造都市横浜との連携を強化し、YPAMに名称を変更。



「UD-LAB横浜 (Urban Design Lab-YOKOHAMA KAIKO)」  
故・北沢猛氏と環境空間のデザインを研究してきたメンバー、秋元康幸、土井一成、菅井 稔、鈴木伸治、野原 卓他が、2020年6月に発足。北沢氏の提唱した、「未来社会の設計」を引き継ぎ、都市デザイン政策の研究、横浜市内を中心に活動する研究団体のネットワーク化、そして活動拠点づくり「新・未来社会の設計」を目指している。





## AIR 2021 SPRING 5/28-30 6/4-6 オープンスタジオ リポート

4月より制作活動を行ってきた22組のクリエイターのオープンスタジオを開催。直前まで荒々しい現場だったが、当日までには、各人きちんとプレゼンテーションし、お客さんを招き入れる空間に変換した。短いオープン期間にも関わらず、多くの関心をもったお客さんとアーティスト達との和やかな対話が続いた6日間だった。今期AIRは6/8で終了し、次回は、6/14からメンバーも半分は入れ替わり、BankART AIR SUMMERとして2ヶ月間の活動が始まる。(BankART1929 HPより)



片岡純也+岩竹理恵



渡辺 篤

## Under 35 2021

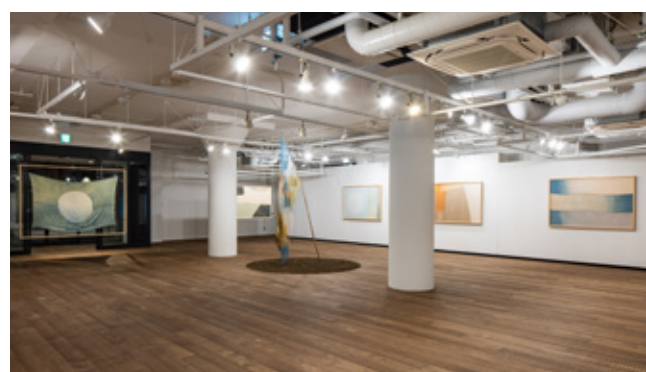
35歳以下の若手作家を個展形式で紹介するUnder35。今回はBankART KAIKOにて招待2名公募5名を選出し、3期にわたって開催。



井原宏路

1期目(4/23~5/9)は、招待選出の井原宏路氏と山本愛子氏だ。井原氏は、鉄、真鍮のピースを集積した集合体で現れた実寸大の象やサイの彫刻の初期作《fading》というシリーズがあり、BankARTでも過去何度か出品しているの、見覚えのある人は多いのではないだろうか。本展では、動物の食べ物や糞、巣を素材として扱った作品を中心に発表。《cycling》というシリーズでは、羊、豚、鹿それぞれの糞を集積させ、その動物のかたちを再現している。近づく糞そのものの生々しい形にぎょっとさせられるが、漆によるコーティングを施しているため、工芸的な美しさも孕んでおり、じっと観察する人も多い。特に子供には大人気だ。他、ミズの糞塚、蚕紗(カイコの糞)などを扱った壁画、レリーフ、ジュエリー、映像等が会場に並ぶ。素材そのものを集めるのではなく、焼成し、漆や金彩を施すなどそれぞれの素材の組み合わせと変化で生まれたかたちを、ぜひ楽しんでほしい。

山本氏は、染色技術を主に用いる作家で、アジアを中心に積極的に活動している。BankARTでも2017年にチューターとして、インドネシアの染色作家を招きワークショップを企画してくれた。中国杭州、台湾などでも滞在と発表を行い、2020年からは横須賀市がサポートする施設を拠点に活動。染料になる藍などの植物を育てることに取り組んでいる。今回は、横須賀で育てた植物、アジア各国で手に入れた天然素材を用いた草木染めの平面作品《あわいのた》9点を発表。きめ細かな絹布に、藍、柿、茜、クルミなどの抽出色が染み込んでいる途中のような、一瞬の静謐さがある。中央には大きな旗が、空間・時間のあわいで揺らめいている。



山本愛子

第2期(5/14~5/30)は、公募選出による3名の個展。金子未弥氏は、黄金町バザール2020で公開制作した《未発見の小惑星観測所》を基に作品を展開。今回は単管、標識、ガードレールなど、街の中にある素材を加工し、《都市計画》と称したインスタレーションを作成した。選ばれた言葉と語られた物語、関係づけられた地図を感じ取ってほしい。



金子未弥

木下理子氏は、一昨年武蔵美大学院の油画コースを修了。青と白のモノクロームの抽象的な平面作品が並ぶ。これらの作品は、感光紙に紐や綿などを置くことで、光が多く当たる部分は青く、影の部分が白くなるというサイアノタイプ(日光写真)という技法が用いられている。写真にも近い技法だが、木下氏はこの作品をドローイング(線画)と称している。その他、展示空間には、アルミホイルや銅線などで作られた、空調、人の動きで、ゆらめく線画のようなオブジェクトが点在する。



木下理子

敷地理氏は、東京芸大大学院メディア映像修了という経歴だが、学生時代からパフォーマンスを主に活動している作家だ。今回は、「パフォーマンスをどう展示するか」に挑んでいる。会場では、ダイエットマシンが無造作に5台並べられ、その上には日常の衣服やゴミがブルブルと揺れている。ときおり敷地本人もマシンにのり、ほかの物と同じように揺れ、声をゆらし、揺れながら飲むカフェオレがこぼれ落ちる様子に観客は笑う。他、イヤホンから流れる指示に従い、スマホを操作して閲覧する作品、見る角度で像が変わるレンチキュラー作品なども。鑑賞者自体が振動させられる装置のような空間だった。

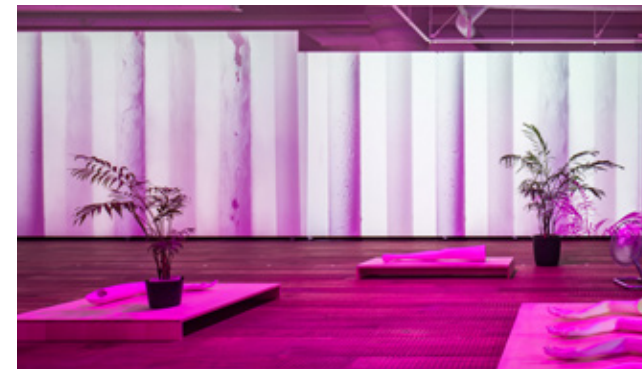


敷地理



菅実花

第3期(6/4~6/20)は、菅実花氏と諫山元貴氏の個展。ラプドールを妊婦姿で撮影した作品《The Future Mother》で注目を集める菅氏。近年制作している自身の顔を型取り作成した人形とともに写るセルフポートレートシリーズ「あなたを離さない」では、人間らしい人形と、人形らしい人間が並び映し出されており、どちらが本物なのかを謎解きするような作品だ。今回は、ストッキングをレンズのフィルターとして撮影したことで、ソフトフォーカスなイメージがより虚実の境界へと誘う作品になっている。



諫山元貴

諫山氏は、広島を拠点に活動する作家。15mの壁面には、白い棒状の塔がゆっくりと崩壊していく映像が映し出されている。それと、マネキンや自身を3Dスキャンした頭部・腕・脚のパーツが台上に並べられ、観葉植物とピンクの植物養成ライトが配されたインスタレーション。この2要素がリンクして、現実世界から切り離されたような空間が出現している。長時間、この光景を眺める人も多い。諫山氏いわく、「近い将来iPS細胞医療の発達で人間のパーツも取替可能にあっという間に、身体もそれを取り巻く環境も、終わりのある物理的な時間がなくなり、生と死の概念が無くなってしまふ」とのこと。近未来的な価値観でオリジナルを問う2人の作家、モチーフなど相似点もあるからこそ、作家の表現や、姿勢を比較して楽しんでいただければと思う。(BankART1929 HPより)

### 編集後記

○35歳以下の若いアーティストの連続個展「Under35」、動員は少なめであったが、充実した内容が続いた。作品が売れる、次の展覧会に誘われる、プレスで紹介される等、具体的なリスボンが7人の作家共通にあった。カタログを1,500冊作成し、1,000冊を作家に謹呈、多数の人に知ってもらおうという基本方針も、ここ15年間継続してきた。ありがたいことに、これも少しずつだが、動き始めて成果を出している。

○AIRプログラムは、コロナ禍の中で有効な手段だ。急に展覧会がキャンセルになっても、変わりのプログラムはそう簡単に構築できるものではない。その点、AIRプログラムはなんといってもすぐに始められる。そして、始まってから、皆の顔を見ながら、次のプログラムを組むことができる。アーティストトーク、オープンスタジオ、茶話会、共同作業……。これらのプログラムは、やりながら、走りながら具体化していくことができるAIR事業のもつ、素晴らしい資質だ。